

書 評

Kay Anderson, Mona Domosh, Steve Pile and Nigel Thrift eds.: *Handbook of Cultural Geography*

(ケイ・アンダーソン, モナ・ドモシュ, スティーブ・パイル, ナイジェル・スリフト編 『文化地理学ハンドブック』)

London, Thousand Oaks and New Delhi: SAGE Publications, 2003, 580p., £ 80.00.

本書の9つのセクションのイントロダクションおよび31の章は、8ヶ国50人の執筆者によって新たに書き下ろされたもので、この出版社の他のハンドブック・シリーズと同様に、この学問分野のいわば state of the art の専門研究者への提示を目的にしたものである。ここに収録されている文章のいくつかは、今後の研究のベンチマークになると考えられる。

「文化地理学」という分野について、これは大変な課題であったにちがいない。「大変な」というのは、別のところでも言及した¹⁾が、形容詞つきの地理学下位分野のなかで、文化地理学ほど過去20年間に理論的立場が多様化し、また研究対象が拡散した分野はないと考えられるからである。本書は、この多様化し拡散した文化地理学の理論および対象を、他の概説書・リーディングスに比して非常に良くカバーしている。単に多岐にわたる理論的視角と広範な分野の論文を寄せ集めたのではなく、4人の編者による冒頭の35ページにおよぶ A Rough Guide において、明確な主張がなされている。ラフというにはほど遠い入念な導入であり主張であって、まず第1ページにはニューオリンズの墓地の写真が掲げられ、「ここに文化地理学が眠る。1925年出生、2002年没」と記されている。1925年は C.Sauer の *The Morphology of Landscape* 刊行の年である。現在生きている文化地理学の知的フロンティアとして、編者たちは「事物の分布としての文化」、「生活様式としての文化」、「意味としての文化」、「実践 (doing) としての文化」、「権力としての文化」の5つをあげ、本書を貫く基本テーマとしてこれらを論じている。そして文化と地理との関係を、「文化について空間的に考え、空間について文化的に考える」のマキシムを通じて説明している。ここまでは概論風であるが、これに続

いて、現在の文化地理学者が、いかなる新しい方法で対象にアプローチし、世界についての古い物語に替わる新しい物語をいかに語るかを示すために、4人の編者が、いわば各論を展開している。たとえば、スリフトは「においの地理」と題して、環境の重要な構成要素でありコミュニケーションの手段でもあるアロマについて語り、パイルは「1999年から2001年までの5月1日のロンドン」について語り、ドモシュは、文学作品のテキスト分析から、19世紀ニューヨークに消費文明の兆しをみている。シドニーの農業ショーを通じて人間中心主義と西欧中心主義の欺瞞性をついたアンダーソンの文章は、ラディカルなサウアー批判にもなっている。サウアーの遺産の批判的吟味は、明示的にも暗示的にも多くの章で展開されている。第13章の T.Cresswell は、実践 (景観を生き利用すること) という視点が文化生態学に欠如していることを指摘し、第10章の S.Hinchliffe は、景観の意味の形成を考察することなしには景観政策・景観イデオロギーの批判は不可能なことを主張する。D.Cosgrove は第12章において、ヨーロッパ的 (アメリカ的はその亜種である) 「見る感覚」を、階級・ジェンダー・エスニシティにまで論及しながら相対化しようとしている。コスグローヴが写真・絵画作品からカリフォルニアの農業景観の読解をしているのに対し、D.Mitchell は第11章において、おなじカリフォルニアの農業景観を、生きた労働が石化・物質化したもの (死んだ労働) として把握する景観の政治経済学を展開している。文化景観のアプローチには存在論的多元性が必要であると主張する第31章の R.Howitt と S.Suchet-Pearson と同様に、コスグローヴもミッチェルも、欧米的観点の相対化を通じて、暗示的にサウアーの遺産に対するアンチテーゼを提起し

ているのである。オリジナルなマルクス理解から出発したコスグローヴを別に、多くの執筆者に大きな影響を与えているのは、脱構築論とカルチュラルスタディーズ、とくにグラムシに由来するヘゲモニー論である。

このような本書の特色、とくに科学と技術とを社会的コンテキストのなかに置き直す B. Latour に依拠して、文化地理学からの自然の欠落をとく議論(たとえば第8章の N.Castree)に対しては、「サウアーの弟子の弟子の弟子」の立場からの、イギリス的偏向に由来する本書の最大の欠陥であるとする批判²⁾がある。しかし、冒頭の A Rough Guide で编者たちがはっきりと主張しているように、サウアーの亡霊を葬り、ポストストラクチャルな観点から文化地理学を再構築し、同時に西洋中心主義的偏見から自由になって対象を見直すという意味での文化地理学の革新が、1980年代のイギリスの社会地理学のなかではじまり、いまやそれが世界の新しい文化地理学の主流になりつつあるのであるから、本書の内容をイギリス的偏向とみなすのはあたらない。文化地理学に関しては、AAGのマジョリティーあるいはパンテオンが、あまりに保守的だというだけのことである。

本書のすべての章を紹介することはできないが、9つのセクションの表題は、1.社会的なものを再考する、2.経済の諸文化、3.文化である自然(Culture natures)、4.景観、5.主観性の位置づけ(Placing subjectivities)、6.帝国以後、7.西洋をこえて、8.地政学的諸文化、9.知識の諸空間である。本書の大きな特色は、第6セクションおよび第7セクションに収録されている論文のみでなく、ポストコロニアルな視角からの論考あるいは欧米以外の事例研究が多いことで、地理学のリーディングスとして極めて斬新なことである。第4セクションでは、J. Wolch, J.Emel および C.Wilbert により、そして第9章においても、文化相対主義の立場から、人間にとっての動物の文化地理が再構築されなければならないことが主張されている。第7セクションで注目されるのは第22章の David Slater で、ユーロアメリカニズムと一括

せず、アメリカ合衆国とヨーロッパ諸国との相違に注目する必要をといている。植民地であった過去、国内に先住民、アフリカ系アメリカ人、ヒスパニックという3種類の他者をもったこと、そして現在唯一の超大国であるだけでなく唯一の「帝国」であり、ここから「南」に対するグローバルな干渉と、国内でも国外でも民主主義に最大の価値を付与するという、アメリカ合衆国の矛盾する現実がうみだされるのである。これは明らかに9・11をうけた言説である。

第5セクションでは、ジェンダーのみでなくクイアーの文化地理学がとりあげられているが、これらの問題もこのセクションのみでなく、他の多くの章で論じられている。C.McEwanの第21章は、黒人世界および第3世界におけるフェミニズムを論じたものである。西洋フェミニズムの普遍性に異議を申し立てるだけなら、相対主義の迷路におちいるだけであり、実践あるいは文化政策から理論を汲みとるためには、IMF/WTOに反対する反グローバリズム運動と共通の次元での西洋の相対化が必要であることが指摘されている。国境をこえたフェミニズムの問題は J.P.Sharp の第25章でも考察されている。グローバリゼーションのもとで、ジェンダーも国境をこえた問題になると考えられがちであるが、社会的構築物としての家父長制あるいは男性優位は、国境を強化して女性に対する支配力を拡大することを、アメリカの移民立法、皆としてのEUなどを事例にして示している。

シンガポールの B.S.A.Yeoh など少数の例外をのぞいて、本書の執筆者の大部分は、欧米のそして白人の研究者である。彼らによって、西洋中心主義に対する真摯な反省がなされ、非西洋世界の事例研究が積みあげられているのである。私たち日本人地理学徒がすべきことは、まず私たちのなかにあるエスノセントリズムを総点検することであろう。

本書は、2003年から2004年の1年間、私が主宰した日本の若い地理学徒との輪読会³⁾でとりあげられた。この書評は、そこにおける討論に大きく負っている。

注

- 1) 竹内啓一2004 Shurmer-Smith, P. ed. 2002. *Doing cultural geography*. London: SAGE Publication に対する書評 (駒澤地理40: 149-51)
- 2) 本書に対する Myers, G.A.2003 の書評 (*Annals A.A.G.* 90 934-36)。イギリス的偏向(UK slant)の根拠として、マイヤーは執筆者のほとんど半数がイギリスの研究機関に籍を置き、北アメリカに籍を置く23名のうちほとんど半数がイギリス生まれかイギリスで教育を受けていることをあげ、またサウアーの遺産を継承するアメリカ文化地理学の主流が無視されている証左として、AAG の文化地理学研究グループが、生存するもつと

- も顕著な文化地理学のプラクティショナーとして名前をあげた15名のうち11名が本書ではまったく言及されていない、批判的にもされていないことを指摘している。彼の書評は、さらに自分の書いたものがたった2点しか参考にされておらず、他の参考にされている文献に比して均衡を失っていることにまで文句をつけるという、私が今までに見たこともないようなすさまじいものである。
- 3) 輪読会参加者は、在外などの理由での部分参加をふくめて以下の方(アイウエオ順)である。菊池慶之、近藤章夫、鈴木重幾、瀬戸寿一、高橋健太郎、山口太郎、山本大策
(竹内啓一)

倉沢 進・浅川達人編 『新編 東京圏の社会地図 1975-90』

東京大学出版会 2004年 8+xi+324p.

本書は、同社から1986年に出版された、倉沢進編『東京の社会地図』(以降、旧版と呼称する)の続編にあたる。旧版と本書の執筆陣は、ともに都市社会学者から構成されている。旧版の目的は、当時の社会地区分析や因子生態研究の分野において、因子や変数の析出に関心が集中していたことを批判し、空間構造のパターンや類型比較に立ち返るというものであった。一方、本書では筆頭編者の倉沢 進を除いて、執筆陣が一新され、さらに目的も、世界都市化の進展やバブル崩壊の前の1975年頃と、その後の1990年頃の間における、東京圏と東京都区内の空間構造の実態把握とその変容を地図化によって説明するという、より実践的なものになっている。この点は、東京都区内のスケールでの1975年頃の1時点のみの分析であった旧版と大きく異なる。これらに本書が改訂版ではなく、「新編」と付されている所以がある。

体裁もB5判からA5判へコンパクトになっている。また旧版では、見開きの片方のページに地図を配して、もう一方に日本語と英語によるその簡単な解説が付される形式でほぼ統一されていた。それに対して、本書には旧版のよう

な定式はないものの、本文中には旧版の2.9倍にあたる292枚の地図が盛り込まれ、これらは日本語のみで詳細に解説されている。ここから、地図集として東京の空間構造を紹介するにとどまらず、より多くの主題図から、それを説明しようとする執筆陣の意図がうかがえる。

ただし本書には、“*New Social Atlas of Metropolitan Tokyo, 1975-90*”という英語タイトルが付されており、地図集としての位置づけは変わってはいない。実際、どの章から読み始めてもよいという旧版の形式は本書にも引き継がれている。

本書の構成は4部15章で、旧版の2部11章から大幅に改変されている。まず本書の第部「総括編」は、第1章「社会地図：範囲と方法」と第2章「東京圏の空間構造とその変動 1975-90」から構成されている。第1章では、本書の背景となる社会地図研究の流れや、旧版での研究方法とその成果によって本研究の位置づけがなされ、本書の概要が述べられている。用いたデータや社会地図の作成方法などは簡潔な記載にとどまっているが、これは第部データ編に、第14章「データおよび地図の構成」、第15